評

児童文学

最首悟

'87.8

読者は大人の〈子供もの〉

子どもを弱者とする人間観からは…

淀みと閉塞を区別

本を読むのはたいてい電車の中だ。電車に乗って本を読むなんてもったいないと言ったのは高橋和巳だが、いろいろ忘れるために、例えば何十種類の匂いなど気になり出すと喘息が起こってくるから、そのもったいないことを強迫的にしている。

読むのは、〈時代もの〉〈推理もの〉〈子供もの〉である。〈子供もの〉は文庫本が少ないので困る。今は〈推理もの〉全盛のように思える。こんなに読まれるとは思えなかったのがつい十年ほど前だから、〈子供もの〉も意想外に流行る時代が来るかもしれない。

しかし、その予想にあまり心はずまない。〈推理もの〉が求められる、あるいは書きやすい社会が住みやすい社会でないように、〈子供もの〉の需要が増える社会は今より確実に淀み度が増すだろうからである。でもここがつらいところだが、その対極の荒々しい軍事・資本一体の海外侵略よりは、むしろ淀みを選びたい。そんな対極じゃなくて若々しい開放的な極があるだろうといわれそうだが、こ

とはそのような極に向う具体的な方策が見えなくなったために起こっているのである。

私がこの二十年間やってきたことは、もしあるとすれば、「もっとゆっくり」と掛け声をかける潮流に一滴を加えることだったろう。十年前に重い障害をもつ星子が生れて、そのことは自覚的になった。「もっとゆっくり」は非効率や不経済を内包しているのだから、淀みや停滞やじり貧につながらなくはない。「もっとゆっくり」が「真のゆたかさ」や「共生」と連動することは、もちろん心情であり望みである。

しかし片方で私はこの社会に生き、現社会の価値観に無縁であることはできない。そういう価値観からすれば、停滞はマイナスだ。そしてそのマイナスをあえて選ぶところに、私は私の既成の価値観の綻びを見ているのである。でも綻びは綻びであって、淀みと閉けばやはり心ははずまない。そう思うもう一つの理由は、近接未来では淀みがほぼ必然だからである。

当面するところ、淀みと閉塞を区別し、淀みがイコール閉塞ではないことに力をつくそう。そこをかいくぐらないと、心情としての「共生」から離脱することができないと思うのである。

そしておそらく、淀み社会がそれなりに安定して、閉塞から暴走へという方向をとらないバロメータとして、〈子供もの〉に注目すべきである。森毅が佐藤宗子の『「家なき子」の旅』(平凡社)の書評で、「いまは、児童文学は『教育』の枠の中のことでなく、現代文化の一部になっているのだから」(朝日新聞、七・二七)と言っている。山中恒・佐野美津男は児童文学を「教育」から引きはなそうとして「児童読物」に意をはらった。いまその努力の申斐が現われてきたというべきか。まだ楽観はできないにしても、これから森毅のような言い方は増えていくだろう。

しかし大人読者を対象にした〈子供もの〉出よ、という発言はまだ圧倒的に少ない。〈子供もの〉とは、あくまで子どもが読むと想定して、子どもの世界を描きながら、読者は大人であるという、まわりくどいエンタテイメントである。私の切実さでいえば、子どものことを判りたいと思って読むのに、子どもは判らないなあとため息をついたり、子どもに喝采をおくったりしている作品に出会うと、そうだそうだと安心する〈楽しみ〉なのである。

大人の重包囲を突き破り、大人の思いもおよばない社会をつくりあげるだろう子どものエネルギー、大人の至らなさを充分承知している子どもの賢さ、それらを作品化できる作者は、きっと、わからない存在である子どもへの期待を十全に持っているに違いないのである。

先生への共鳴と喝采

日野多香子は、『水面の肖像』(ほるぷ出版・一二〇〇円、一九八七・七・一〇)のあとがきで、偏差値と学歴優先の社会で受験戦争がたちふさがり、「子どもたちはその渦の中におとしいれられ、ついには、無気力に、非行に、自殺にとおいやられるものが多く出ているのが現状です」と述べている。自殺もできず、さりとて確信を持って生きているわけではない私には、とうていこのような子ども観はもてない。大人がやれということをやらないのが無気力ではないし、隙あらば非行はしたいのだし、自殺をするほどに勇気も激情もまだ失っていないのだ。

子ども・障害者・精神病者、これらの人々を基本的に弱者と規定する人間観からは、保護・隔離・収容の関係しか出て来ない。〈思いやり〉や〈いたわり〉は、その関係性のバリエーションである。〈子供もの〉でいえば、強者の自己意識は〈子供もの〉の書き手も読み手も産み出さないのである。

『最終ラウンドのヒーロー』(中島信子、大日本図書・一二〇〇円、一九八七・七・一〇)は『水面の肖像』と同じように、太平洋戦争を背景にしている。しかし、定年で去っていく平の老先生に対する少年の敬愛が、何度もダメッジ・ブロウをうけてへたばりながら最終ラウンドまで闘った、先生という人間への共感と喝采に半分方支えられている、ということを表現できた点で〈子供もの〉らしくなった。少年が先生に、自分は後ろを向いて駆け去りながら、「がんばれよなあ」と声をかけるシーンがある。昭和二年生れの先生のダメッジに、昭和一一年生れの私は、〈落ちない涙〉をあふらせるのであるが、こういうシーンになると、ついに鼻の中を液体が通って行くのを感じることになる。

『扉のむこうの物語』(岡田淳、理論社・一五〇〇円、一九八七・七)の少年はややできすぎだが、扉のむこうに一緒に入ったスナックのママなる女性が突然少女に戻り、行動を共にする、その女性がどうやら父親と結婚するかもしれないし、「ひょっこはからにもどれない」と思うあたり、なかなか複雑である。

(さいしゅ・さとる氏＝東京大学助手・生物学専攻)